

平成27年度 学校評価自己評価書

1 総括

(1) 教育目標

- ①生活のなかから問題を見つけ、自ら生活を切り拓いていくことのできる児童の育成
→「生きる力」の育成（生活教育の発展と充実）
- ②経験や体験を重視し、事実をもとに問題の解決を図ろうとする児童の育成
→問題解決能力の育成
- ③友だちの気持ちを思いやり、互いに磨き合おうとする児童の育成
→共存の意識にたった人間関係の形成

(2) 中長期経営目標

- ・自由で自立した人格の育成と社会的責任の自覚を養う。
- ・児童の多様な能力に対応した教育を行うとともに、個性を尊重しつつ学力の向上を図る。
- ・大学と連携し、子ども一人一人の個性と生活経験を大切にした「生活教育」についての教育研究を行う。
- ・安全で安心な教育環境を整備し、安全・健康教育を進める。
- ・国立大学法人附属学校として、大学と連携した学校マネジメントを推進する。
- ・機能的な学校運営を行うとともに、教職員の職能向上に努める。
- ・開かれた学校づくりを進める。
- ・学校の様子や状況について、家庭や地域に積極的に情報提供し、学校評価を学校運営に生かす。

(3) 短期経営目標（本年度の重点目標）

①学習指導

- ・基礎的・基本的な知識・技能の習得を図る。
- ・各教科・くすのき学習で位置づけた育みたい子どもの力を培う授業展開を図る。
- ・他者とのかかわりやつながりのなかで自らの問題を解決し、互いに高め合える子どもの姿をめざす。
- ・コンピュータなどの情報機器の有効な活用方法を探るとともに、様々な情報を取捨選択し、総合的・的確な判断のなかで、情報活用できる能力を育成する。
- ・「食」をはじめとした自分自身の生活への関心を高め、健康で安全な生活を実践できる子どもの姿をめざす。

②研究

- ・「自らの意思で判断・決定していく子ども」を研究主題に掲げ、判断・決定につながる子どもたちの「自覚」に着目し、子どもたちが見通しをもって追究を進めていくための具体的な教師支援のあり方を探る。
- ・問題解決的な学習を展開するなかで、子どもの問題意識を大切にし、多面的かつ総合的なものの見方や考え方、感じ方を育む授業あり方を探る。
- ・大学と連携し、通常学級における特別支援教育や教育相談の体制整備を図り、支援のあり方を探る。
- ・道徳・英語の教科化を視野に入れ、子どもの生活にもとづく実践的な道徳・英語の授業のあり方を探る。

③教育実習

- ・教育実習生に対し、教育活動の基本的なあり方を具体的な実践を通して指導する。

④学校運営

- ・学校評価をもとにした改善点を点検しながら、よりよい学校運営をめざす。
- ・行事の精選・効率化の推進とタイムマネジメント意識の高揚により、勤務時間への短縮に努め、教職員の健康維持を図る。

2 自己評価の実施体制

本年度実施した評価項目については、短期経営目標（本年度の重点目標）をさらに具体化して設定した。また、昨年度見直された評価項目を継承・継続的に評価することで、教育活動の成果や問題点を浮き彫りにし、改善を図ろうと考えた。問題解決学習を継承していくうえで欠くことができない、粘り強く問題解決に向かう子どもの姿といった研究分野の評価項目も継続設定し、分析することで、これからの研究の方向性を模索する一助としたいと考えた。さらに、本年度は前年度の学校評議員会議で指摘されたアンケートの実施時期について見直しを図り、1学期末から2学期中旬に変更した。

アンケート調査の実施（実施時期 9月29日（火）～10月6日（火））については、①保護者 ②児童 ③教師を対象に行った。設問は21問とし、個人情報保護の観点から匿名性の担保に配慮した。

【平成27年度実施評価項目】

- ① 附属小学校への満足度
 - ② 子どもの主体性の伸長（H26内容変更）
 - ③ 子どもたちの人間関係
 - ④ 家庭との連携の強化（H26内容変更）
 - ⑤ 子どもの理解（日記・話を聞く姿勢）
 - ⑥ 子どもの理解（スクールカウンセラー・アイリスパートナーを含む）
 - ⑦ スピーチによる「聴く力」「話す力」の向上
 - ⑧ あおいタイムや授業のなかでの「読む」「書く」「計算」などの基礎的な知識・技能の習得
 - ⑨ 問題解決能力の向上
 - ⑩ 英語活動の充実（H27内容変更）
 - ⑪ コンピュータや本から得た情報の活用能力（H25内容変更）
 - ⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）
 - ⑬ 給食指導（配膳，会食，片付け）の指導
 - ⑭ 健康・安全に対する配慮
 - ⑮ 基本的な生活習慣（あいさつ・時間・ものを大切にする）の定着
 - ⑯ 清掃活動の指導（H27内容変更）
 - ⑰ 子どもの規範意識の向上（H26新規）
 - ⑱ 学校施設・設備・教室環境への留意
 - ⑲ 学校での出来事の公開（HP，学級・学年通信などの充実）
 - ⑳ 危機管理意識
 - ㉑ 学校評価をもとにした学校運営の改善
- ※ タイムマネジメントへの意識（教員のみ）

3 評価結果（「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した）

100%～80%・・・A	80%～70%以上・・・B
70%～50%・・・C	50%未満・・・D

「よくあてはまる」、「ややあてはまる」の合計の割合で判断した理由は、以下の3点である。

- ① 「よくあてはまる」「ややあてはまる」「あまりできていない」「できていない」のいずれかを選択する形で行っている。教育活動において、「よくあてはまる」「ややあてはまる」の割合の多いことは、教育活動が円滑に行われていることを示すと考える。また、「あまりできていない」「できていない」の割合が多い評価内容の原因を分析し、緊急性や重要度を吟味したうえで、教育活動に反映させたいと考える。
- ② 昨年度との傾向の違いを比較をするためにも、この方法を継承する。
- ③ 評価対象となっている「保護者」「児童」「教師」の意識の違いからも、教育活動に対する意識や方法のあり方を探ることができると考える。

4 考 察

(1) 全体評価

設問1「附属小学校への満足度」及び設問2「子どもの主体性の伸長」については、今年度も9割以上の高い数値を示している。子どもたちと保護者が学校に愛着と誇りをもっていること、本校の進める教育活動に理解を示していることが窺われる。子どもたちも充実した学校生活を送っていることを表していると考えられる。また、設問3「子どもたちの人間関係」も、教師、保護者、子どもと高い評価となっており、子どもたちは学級のなかで安心して学校生活を送っているといえる。

本年度文章内容に改訂を加えた設問4「家庭との連携」については、教師の評価は変わっていないが、子どもの評価がAに上がっている。学年通信や学級通信で子どもの具体的な姿を伝えたり、教師が保護者に適切に連絡をとったりしていることから、子どもたちが教師と保護者の関係に安心感を感じているからであろう。設問5「子ども理解」についても、子どもの評価が9割に達したことからも理解できる成果である。さらに、設問15「基本的な生活習慣の定着」や設問16「清掃活動の指導」では、本年度、保護者の評価が上がっている。子どもの姿から、保護者がそのように感じていることは好ましいことである。

設問14「健康・安全に対する配慮」についても、本年度、子どもと教師の評価がAに上がった。保健衛生部の丁寧な取り組みや一斉下校などの通学安全に関する指導が、子どもたちにも意識されている表れだと考える。ただ、昨年度から実施している設問17「子どもの規範意識の向上」については、保護者と子ども、教師の評価には大きな隔りがある。保護者や子どもがおおむね守れているという意識をもっているのに対し、教員の評価は違っている。地域からの苦情や学校生活のなかでの危機感からか、子どもの指導が十分にできていないと厳しく評価しているととらえられる。一方、設問8「基礎的な知識・技能の習得」、設問13「給食の指導」、設問16「清掃活動の指導」については、保護者の評価が昨年度と変わらない評価である。学校公開や授業参観、通信、ホームページなどで、学校の教育活動を保護者に伝えていくなかでの教員に対する期待の表れであると考えられる。

また、設問11「コンピュータや本から得た情報の活用力」、設問12「自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）」について、教員の評価はC評価で厳しいものであるのに対し、保護者・子どもの評価はAである。「情報の活用」「食育」について、教師評価がDからCに上がっているのは、改善策をもとにした取り組みにそれなりの手応えを感じてきているからであろう。

全般的には、保護者と子どもの評価に大きな変動は見られない。評価項目によるが、保護者も子どももA評価の割合が少し上がっているものも多く見受けられる。教師の取り組み及び本校の教育活動が、子どもと保護者に認められているということであろう。ただ、教師の評価のなかでその割合が下がっているものも多くある。設問8、10、16、18、19、20など、学校生活を支える基礎的な取り組み内容の項目に、教師として手応えを感じていないことから、改めて学校での取り組みのあり方を見直していく必要がある。

教育目標に則し、短期経営目標を具体化した設問に対し、保護者及び児童にAの割合が多くみられることから、本校の教育目標、教育活動に対し、多くの保護者からの理解を得ており、教師は自信をもって教育活動を進めてよいと考える。

(2) 本年度の修正項目と結果

本年度から、英語タイムという英語の基礎基本を習得していくための時間を設定した。また、主体的なコミュニケーションができる子どもの育成を目指す英語教育の推進を図るため、研究としても英語の取り組みに力を入れ始めた。以上のことから、これまで楽しく取り組むことを中心とした評価内容を、「自分から英語を話すことができている」という主体的にコミュニケーションがとれているかという内容に改善した。また、保護者や教師の評価内容では、英語タイムを位置づけ、英語の学びを意識し、主体的にコミュニケーションを取る姿勢が育っているかという観点で評価していくことができるようにした。

英語活動の充実	
設問	教師…子どもが英語に親しみ、英語を使って楽しくコミュニケーションをとることができる授業の工夫を行っている。 保護者…子どもが英語に親しめるように、楽しく英語タイムや英語活動に参加できる工夫がされている。

10	児 童…英語活動の授業は楽しく、自分から英語を話すことができている。				
	教 師：	今年度C	52.2%	昨年度A	87.0%
	保護者：	今年度A	86.2%	昨年度A	88.2%
	児 童：	今年度B	78.4%	昨年度A	90.1%

保護者の評価は、昨年度と同様にAである。本校の英語教育の推進に一定の理解をしていただいております、自信をもって今後も取り組んでいくことができる。しかし、子どもの評価は、昨年度AであったものがBに低下している。本年度、評価内容に「自分から英語を話す」という文章を付け加えた。授業のなかで自分から英語を使うこと、主体的に話すということに苦手意識を抱いている子どもの存在が感じられる。また、教員の評価は、AからCへと大きく低下した。これは、本年度、英語タイムを新たに設け、活動計画表や具体的な実施案が提案されたが、教師として十分にやりきれていない、教師の厳しい評価からくる数値であると考えます。英語教育の推進に向け、この評価の結果を反省して、改めて取り組むべきことの共通理解を図って推進していくことが重要である。

設問16「清掃活動の指導」は、教師と子どもの評価が毎年違っている評価項目である。本年度は子どもたち自身の感じているまじめさが具体的に評価できるように「そうじの時間の終わりまで」というようにまじめさの視点を付け加え、文章内容を変更した。漠然とではなく、具体的に自分の姿が見つめることができるように改善を図った。

清掃活動の指導					
設 問 16	教 師…そうじ時間中に見まわる、共にそうじに取り組むなど、清掃指導ができている。				
	保護者…そうじの意義や意味を理解し、きちんと掃除に取り組むことができるような清掃指導がされている。				
	児 童…そうじの時間の終わりまで、まじめに取り組むことができている。				
	教 師：	今年度C	65.2%	昨年度B	73.9%
	保護者：	今年度B	72.8%	昨年度C	65.1%
	児 童：	今年度A	92.2%	昨年度A	89.8%

設問16は、全体評価でも述べたように子どもの評価は高い。しかし、教師と保護者についてはC、Bと低い評価である。子どもの評価を学年ごとに見ても、どの学年もA評価の結果である。子ども自身は、子どもなりにまじめに取り組んでいるという評価である。一方、教師のC評価については、1学期の学級及び学校の清掃指導に対する不満足感が表れている。これまでの教職経験からの期待、学校の一体的な清掃指導のあり方など、もっと取り組むことができるという教師の意識が感じられ、今後の指導について検討の必要性がある。ただ、保護者はそのような教師の意識と取り組みを感じてか、評価がBへ上がったことは望ましいことである。

(3) 昨年度の改善対策と今年度の結果

【昨年度の課題とその対策】

- ⑪ コンピュータや本から得た情報の活用能力
- ⑫ 自校給食がもたらす子どもへの影響（食育）
- ⑬ 子どもの規範意識の向上（④ 家庭との連携の強化）

【⑪コンピュータや本から得た情報の活用能力】

コンピュータや本などから得た情報(知識)を、実際の生活のなかで活用することは、わたしたちがめざしている生活教育と切っても切れない深いつながりがあると考えます。調べたことをもとに、自分で判断・決定していく力を身につけ、それを生かして問題を解決していく力を育てていく必要がある。子どもたちの生活すべての場面にお

いて、生活に生きてはたらく力を養うことが大切である。子どもたちにとって意味のある教育活動を展開していきたい。



① コンピュータや本から得た情報の活用能力																					
改善策	①情報の活用能力を育むため、教育課程から見直していく。そのなかで、基礎基本の定着を図るものと活用に重きを置くものの違いを明確にし、その違いを理解したうえで活動が進められるようにする。 ②チャレンジ学習など調べたことをもとにまとめた成果を、保護者会や懇談会の場などを活用し、保護者に伝えることができるようにする。 ③実践やふだんの授業のなかで、活用場面を問題解決学習で行ったり、実践に加えて明確な願いをもったくすのき学習を確実に行うなど、活用場面が繰り返されるよう授業改善を図る。																				
数値	設問11 子どもは、人に聞いたり、コンピュータや本などを使って調べていた知識を、学習や普段の生活のなかに生かそうとしている。 <table border="1" style="margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成26年度</th> <th>：</th> <th>平成27年度到達目標</th> <th>平成27年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>教師</td> <td>D 43.5%</td> <td>：</td> <td>→ A 80%</td> <td style="background-color: yellow;">C 52.2%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>A 82.3%</td> <td>：</td> <td>→ (A 90%)</td> <td style="background-color: lightblue;">A 82.1%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>A 85.0%</td> <td>：</td> <td>→ (A 90%)</td> <td style="background-color: lightblue;">A 80.7%</td> </tr> </tbody> </table>		平成26年度	：	平成27年度到達目標	平成27年度	教師	D 43.5%	：	→ A 80%	C 52.2%	保護者	A 82.3%	：	→ (A 90%)	A 82.1%	児童	A 85.0%	：	→ (A 90%)	A 80.7%
	平成26年度	：	平成27年度到達目標	平成27年度																	
教師	D 43.5%	：	→ A 80%	C 52.2%																	
保護者	A 82.3%	：	→ (A 90%)	A 82.1%																	
児童	A 85.0%	：	→ (A 90%)	A 80.7%																	

【改善点①③について】

本年度、パソコン室のパソコンがすべて新しいノートパソコンに一新された。また、会議室には40台のタブレットパソコンも配置され、情報教育推進の環境面が整備された。それに合わせて、6月22日にタブレットパソコン講習会、6月から7月にかけてパソコンの活用を促す実施期間を設けるなど、情報教育担当を中心にしてパソコンやタブレットパソコンの活用を促した。そのような一連の取り組みの成果もあり、教師の意識はDからCに上がっている。特に、研究実践に利用している教師は、問題解決過程に位置づけて活用場面が繰り返される工夫を考案し、研究的に価値ある取り組みをしている。そのような学級の子どもたちの評価は、格段に高い。その一方で、低学年やどの教師も普段から気軽に使っていけるように環境面や学年段階での積み上げを整理していく必要がある。また、情報活用の推進がパソコンだけにならないように、本の活用についても具体的に取り組んでいかなければならない。

情報教育の推進は、何より教師の意識改善と積極的・計画的な取り組みが求められている。そこで、各教科の基礎基本が取得できるソフトや低学年でも使えるソフトの活用講習会を設けたり、学年段階の情報教育力としての積み上げを整理するなかで、教師の意識改善を図っていく。そして、教育課程の改善の一つとして、2学期もタブレットパソコンの活用促進やパソコン室の実施期間を設けることで、計画的な推進を図っていく。

【改善点②について】

1学期のチャレンジ学習については、昨年度から懇談会が夏休み期間に移動したことで、実施期間が各学年・学級に委ねられ、取り組みの実態が曖昧なものになってきてしまっている。学年によっては、夏休みの自由研究の事前調べ程度になっているものもあり、チャレンジ学習のあり方の検討が必要である。

【⑫自校給食がもたらす影響(食育)】

栄養士は、栄養のバランスや歯の成長などはもちろん、地域食材を活用したメニューを取り入れるなど、子どもたちが口にすると献立に意図をもって作ってくださっている。しかし、子どもたちの給食の様子をみると、簡単に給食を残したり、偏った栄養摂取をしている子どもがいる。

常に温かい給食を食べている子どもたちは、給食を作ってくれている人への感謝の気持ちは忘れてはいない。しかし、給食を通して自らの健康を考えたり、食材と地域

とのつながりを考えたりする子どもの姿はあまりない。食育の生きた教材として自校給食の活用を検討していく必要がある。



② 自校給食による食育の充実																	
改善策	①栄養士や調理員との双方向コミュニケーションを中心とした食育の授業を、担任や学年で立案し、実践する。そして、自分たちの食に対する意識や健康、栄養士や調理員とのかかわりといった視点で、委員会活動につなげていく。 ②先進的な取り組みの事例を職員に紹介するなど、食育を学ぶ機会を設定する。 ③家庭や父母教師会、大学教授を講師に招聘した授業など、家庭や大学との連携のあり方を、保健衛生指導部（教務主任）で探る。																
数値	設問12 附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育ってきている。 <table border="1" style="margin-top: 10px;"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成26年度</th> <th>平成27年度到達目標</th> <th>平成27年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>教師</td> <td>D 34.8%</td> <td>→ A 80%</td> <td>C 60.9%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>A 83.6%</td> <td>→ (A 90%)</td> <td>A 86.0%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>A 93.4%</td> <td></td> <td>A 94.8%</td> </tr> </tbody> </table>		平成26年度	平成27年度到達目標	平成27年度	教師	D 34.8%	→ A 80%	C 60.9%	保護者	A 83.6%	→ (A 90%)	A 86.0%	児童	A 93.4%		A 94.8%
	平成26年度	平成27年度到達目標	平成27年度														
教師	D 34.8%	→ A 80%	C 60.9%														
保護者	A 83.6%	→ (A 90%)	A 86.0%														
児童	A 93.4%		A 94.8%														

【改善点①②について】

保健衛生指導部を中心として食育に関する年間指導計画を立て、それをもとに各学級で授業実践に取り組んできた。1学期は4月15日から21日と6月22日から26日の2回、2学期は9月7日から25日の1回、食育授業実施期間を設け、全学級で「4月：楽しく給食を食べよう」「6月：衛生に気をつけよう」「9月：健康と食事の関係を知ろう」を重点目標に掲げて実施した。定期の実施期間を設けて取り組んでいることで、各学級で様々な工夫を凝らした食育指導を進めている。しかし、アンケート調査の結果からはその成果が十分にみられるまでには至っていない。栄養士や調理員さんとの連携については、給食の配膳・片付け時に交流を図ったり、給食ができるまでの行程をプリントにして配布したりするなど、直接ふれあうだけではない形で、できる範囲で子どもとの距離を縮め、その姿が伝わるように取り組んでいる。保健衛生指導部を中心とした計画的な取り組みが、少しずつ教師や保護者、子どもにも影響を及ぼしていると感じる。2学期は、さらに栄養士や調理員さんとの連携のとり方を考え、給食委員会を中心とした子ども主体の活動を興して食育指導を進め、その成果について明らかにしていきたい。

【改善点③について】

給食だよりや学年通信で、食育に関する取り組みや子どもの様子を伝えていくことで、家庭と協力して食育を進めていく。バランスよく食べることの大切さや給食の現状や残飯の量など、望ましい食育推進に向け、2学期はさらに家庭との連携について強く押し進めていく必要がある。

【⑬子どもの規範意識の向上】及び【⑭家庭との連携の強化】

規範意識は、「誰かが見ているから」「人に言われたから」という判断ではなく、自分の意思で正しいと思う判断をすることであり、教育目標の「生きる力の育成」につながるものである。この規範意識を高めていくことは、自らの意思で判断・決定し、問題を解決していくことができる力を育むことであり、自由で自立した人格の育成と社会的責任の自覚を養うためにも、欠くことができない課題である。また、子どもの規範意識を高めるためには、学校教育だけでなく家庭の教育力を必要とする。学校と家庭が連携をとり、子どもたち一人一人が自由と責任のもとに自らの意思で正しい判断ができる力を育てていける取り組みを検討していく。



⑰ 子どもの規範意識の向上																					
改善策	<p>①児童会を中心とする委員会活動をとおして、附属小のきまりを守る意識を高めていくことで、児童の自主的な活動のなかで規範意識が育めるようにする。</p> <p>②生徒指導主事が通学安全部と連携し、夕打ちでの附属っ子タイムで学校での子どもの様子だけでなく、保護者による朝の立哨で気づかれた子どもの様子を伝えることで、職員間の連携を図る。そして、子どもたちの「自らの意思で判断・決定する」姿を認め、ホームページ等でも紹介をすることで保護者や地域に発信をしていく。</p> <p>③臨時通学班会の話題や登校指導での子どもの様子などを、学年・学級通信で保護者へ伝え、共通理解のもとで指導を行うことができるようにする。</p> <p>④家庭への連絡は、何かあったときにはではなく、学校のなかで見られたよい姿や頑張っている姿などを積極的に伝え、学校での様子が家庭でも話題になるようにする。</p>																				
数値	<p>設問17 学校と保護者が連携をして、社会のルールやマナーを守るようにしている。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成26年度</th> <th>：</th> <th>平成27年度到達目標</th> <th>平成27年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>教師</td> <td>C 60.9%</td> <td>：</td> <td>→ A 80%</td> <td>C 60.9%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>A 83.7%</td> <td>：</td> <td>→ (A 90%)</td> <td>A 88.9%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>A 95.4%</td> <td>：</td> <td></td> <td>A 94.0%</td> </tr> </tbody> </table>		平成26年度	：	平成27年度到達目標	平成27年度	教師	C 60.9%	：	→ A 80%	C 60.9%	保護者	A 83.7%	：	→ (A 90%)	A 88.9%	児童	A 95.4%	：		A 94.0%
	平成26年度	：	平成27年度到達目標	平成27年度																	
教師	C 60.9%	：	→ A 80%	C 60.9%																	
保護者	A 83.7%	：	→ (A 90%)	A 88.9%																	
児童	A 95.4%	：		A 94.0%																	
数値	<p>設問4 教師は、学校での出来事や子どもの様子を知らせたり、心配なときには家庭での様子をうかがったりするなど、家庭と連携をして子どもを見守ってくれている。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>平成26年度</th> <th>：</th> <th>平成27年度到達目標</th> <th>平成27年度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>教師</td> <td>B 78.3%</td> <td>：</td> <td>→ A 80%</td> <td>B 78.3%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>A 89.7%</td> <td>：</td> <td>→ (A 90%)</td> <td>A 87.5%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>B 79.5%</td> <td>：</td> <td>→ A 80%</td> <td>A 85.7%</td> </tr> </tbody> </table>		平成26年度	：	平成27年度到達目標	平成27年度	教師	B 78.3%	：	→ A 80%	B 78.3%	保護者	A 89.7%	：	→ (A 90%)	A 87.5%	児童	B 79.5%	：	→ A 80%	A 85.7%
	平成26年度	：	平成27年度到達目標	平成27年度																	
教師	B 78.3%	：	→ A 80%	B 78.3%																	
保護者	A 89.7%	：	→ (A 90%)	A 87.5%																	
児童	B 79.5%	：	→ A 80%	A 85.7%																	

【改善点①について】

本年度は、生活安全指導部から「ふぞくっ子のきまり」を1学期初旬に発行し、校内の約束やマナーについて、各学級で意識できるように共通理解を図っている。一斉下校では、高学年が中心となって並ばせたり、下校時のマナーについて意識させたりして取り組んでいる。さらに、執行委員会が清掃活動について目標を定め、全校で意識を統一して取り組む姿も見られた。アンケート調査の数値としては、保護者も子どもも昨年度と同じ程度の割合のA評価であるが、この数値が落ちないように今後も取り組んでいく必要がある。ただ、子どもの自主的活動として規範意識を育てていくことが、清掃活動の呼びかけ以外に1学期の取り組みとしてはできていない。また、登下校時の社会的マナーについても苦情の数がまだあることから、もっとよくなるだろうという教師の意識の高さもある。交通マナーを守ろうとしている一斉下校だけでなく、学校生活全般における社会のルールに子どもが目を向け、意識していけるように計画的な取り組みを行っていく必要がある。

【改善点②③について】

バスや電車などの公共交通機関利用に対する子どもの苦情は少なくなっていない。しかし、子どものマナーに対するA評価と教師や周辺の大人が感じているふぞくっ子のマナーの低さの意識の差が、苦情となって表れていると考える。1学期も臨時通学班会を重ねて、子どもへの指導を何度も行っている。一斉下校を通じて、子どもたちにマナー向上や安全指導を促している。2学期以降も、バス内や東岡崎駅での立ち番などの登下校指導を位置づけたり、見本となる高学年の姿を伝えたりするなどして、子どもたちが気づき、考え、実行できるように地道に指導を繰り返していく必要がある。学年通信やHPで、マナーに関する情報が1学期も掲載できていないので、取り組んでいくようにする。

【改善点④について】

子どもたちがよい行いを行った時は学級内、学年間、保護者に伝えていくことを教師が習慣化できるようにしたい。教師の日々の忙しさから毎日ではできないが、保護者への電話が緊急時や困った時だけにならないようにしたい。子どものよい姿を伝えていく取り組みは、保護者と連携した社会的マナーの育成だけでなく、教師への信頼感も醸成していくことになる。設問4の保護者の評価はAであるが、割合が多少減少したことを受けとめ、各自反省して、今後の取り組みの改善につなげていきたい。

(4) 教師による自己評価

【評価Aのなかでも90%以上だった項目】

設問1	附属小学校は、子どもたちが楽しく生活でき、誇れる学校である。	→91.3%
設問2	子どもの自主性や主体性を育む授業作りをしている	→91.3%
設問3	子どもたちが仲間と仲良く過ごすことができる、いじめのない学級づくりをしている	→95.7%

【評価C・Dだった項目】

設問6	アイリスパートナーやスクールカウンセラーの運用に積極的に取り組んでいる	→C 60.9%
設問8	あおいタイムや授業によって、子どもに基礎的な知識・技能の定着を図っている。	→C 65.2%
設問10	子どもが英語に親しみ、英語を使って楽しくコミュニケーションをとることができる授業の工夫を行っている。	→C 52.2%
設問11	子どもが人に聞いたり、コンピュータや本で調べて得た知識や技能を、他の教科や生活のなかで生かすことができるようにしている	→C 60.9%
設問12	自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育ってきている	→C 60.9%
設問16	そうじ時間中に見まわる、共にそうじに取り組むなど、清掃指導ができています。	→C 65.2%
設問17	学校と保護者が連携をして、社会のルールやマナーが身につくような指導ができています	→C 60.9%
設問18	子どもが安全に楽しく生活できる学校設備・教室環境になるよう留意している。	→C 65.2%
設問19	ホームページ、学年・学級だよりなどで、校内のできごとをよく保護者に知らせている。	→C 69.6%

A評価の項目は昨年度と同様だが、C評価が3つ増えており、教師の全体的評価は厳しいものである。設問8「基礎的な知識・技能の習得」や設問10「英語活動の充実」などが低下しており、教師としてやるべきことに不十分さを感じることが窺える。あおいタイムの取り組みや英語活動の推進において、今後さらに具体的な対策の必要性を感じる。一方で、設問7「聴く力・話す力の向上」や設問11「情報の活用能力」、設問12「自校給食がもたらす子どもへの影響」は、研究的な取り組みや本年度の対策によって教師の意識も高く、評価の向上につながっている。学級通信の発行や清掃指導、給食指導など、教師が子どもたちにとってより質の高い教育活動を展開しようと意識して取り組んでいる姿が窺える。

本年度のアンケート結果からも、本校の教師としてそれぞれの教師が教育目標を理解し、常に子どもの自主性や主体性を育む授業づくり、学級づくりを目指して取り組んでいることが伝わってくる。また、設問5がA評価に上がったことは、本校が大切にしている子どもをとらえ、子どもを大切にすることを意識して取り組んでいこうとしている姿勢が感じられ、今後も継続した取り組みが望まれる。ただ、清掃指導や登下校を含めた安全指導、そして学校設備や教室環境の整備など、忙しさのなかで取り組んでいるのになかなか子どもの姿として成果が感じられていないとするならば、改めて学校としての対策を講じていく必要がある。さらに、設問11については、授業のなかで実際に時間を位置づけてコンピュータや本を使いながら取り組んだり、チャレンジ学習の改善を図ったりするなどして、どの教師もできるような共通理解と指導改善が必要である。

(5) 児童による授業評価・満足度評価

【評価Aのなかでも90%以上だった項目】

設問1	附属小学校は、じまんでできる楽しい学校である	→91.7%
設問2	進んで学習に取り組み、楽しく授業を受けることができている	→92.3%
設問5	先生は、学校での出来事や自分のよいところを、お家の人に伝えてくれている。	→92.5%
設問8	あおいタイムや授業によって、読み・書き・計算など基本的なことが身につけてきた	→93.5%
設問12	作ってくれる人への感謝の気持ちをもって、おいしく給食を食べている	→94.8%
設問15	あいさつ、時間を守る、ものを大切にすることができる	→90.5%
設問16	そうじの時間が終わるまで、まじめに取り組むことができている。	→92.2%
設問17	登下校の時、交通ルールやマナーを守り、まわりの人に迷惑をかけないようにできている	→94.0%
設問19	先生は、学年・学級だよりをよく出してくれる	→96.3%
設問20	先生は、安心して学校へ通えるように守ってくれたり、災害時の安全や避難について教えてくれる。	→95.0%
設問21	先生たちは、アンケートなどをもとに、附属小学校をよい学校にしようとしてくれている。	→95.3%

【評価C・Dだった項目】

設問6	附属小学校では、アイリスパートナーやスクールカウンセラー(五十嵐先生)に楽しかったことや、困ったことなどを話したり相談したりできる→C	60.9%
-----	---	-------

90%以上である評価Aの項目が、昨年度に比べ3つ増えて11になった。学校や教師の取り組みに対して子どもたちの評価は向上しているといえる。何より子どもたちが、附属小学校を自慢に思い、楽しく授業を受けていることによさを感じてくれていることは、教師として自信がもてることである。また、設問5, 19, 20, 21などに対する評価が高いことは、子どもが教師の取り組みに信頼をよせてくれていることがわかる。また、本年度、設問4や14の評価が、BからAに変わった。家庭と連携して見守ってくれていることや安全や健康面に配慮して気にかけていることについて、子どもが感じてくれていることは、担任の先生方の対応のよさを物語っていることだと考える。

設問15についてはA評価ではあるが、割合は低下している。この意識の低下を受けとめて、今後も地道に取り組みを続けていく必要がある。設問6についてはC評価であるが、子どもたちがアイリスパートナーへの相談を必要としない結果の表れであると考えられる。必要性のある子どもが、相談箱を利用したり、アイリスパートナーと話している様子もあり、今後も子どもたちのわずかな変化を見逃さず、必要に応じて対応できるような体制を続けていくことが大切であると考えられる。

(6) 保護者による満足度評価

【評価Aのなかでも90%以上だった項目】

設問1	附属小学校は、子どもが楽しく通え、誇れる学校である	→98.0%
設問2	附属小学校は、子どもの自主性や主体性を育む授業づくりの工夫がされている	→98.1%
設問3	附属小学校は、友達と仲良くし、楽しく過ごせる学校である	→97.2%
設問7	朝の会のスピーチによって、子どもに「聴く・話す」力が育っている	→90.4%
設問14	附属小学校は、子どもの安全や健康面に配慮し、適切に対応している。	→92.6%
設問19	ホームページ、学級・学年だよりなどで校内の出来事を知ることができる	→97.3%
設問20	附属小学校は、安全な登下校や防災意識の向上に努める指導がされている。	

設問21 附属小学校は、学校評価をもとにした改善点を点検しながら、開かれた信頼できる学校運営をめざしている。 →93.2%
→96.3%

【評価C・Dだった項目】

・本年度はなし。

90%以上である評価Aの項目が、昨年度に比べ3つ増えて9になった。評価Aの項目は全体的には1つ増えただけであるが、学校や教師の取り組みに対して保護者もわずかだが評価が上がっているといえる。昨年度までは設問16が唯一C評価であったが、今年度はB評価に上がり、C評価が一つもなくなった。保護者の方の評価がこのようにあるのは、学校としては喜ばしいことである。この調査からも、保護者も、児童同様に附属小学校を誇れる学校、信頼できる学校（教師）という意識が感じられ、今後も自信をもって教育活動の展開を推進していくことができる。

ただ、設問8「基礎的な知識・技能の習得」や設問13「給食指導」、設問16「清掃指導」に対する評価についてはきちんと受けとめていくようにしたい。子どもに気づかせ、考えさせていくだけでなく、生活のなかで教えるべきことは教え、取り組ませるべきことはできるようにしてほしいと願う保護者の教師への期待だと考える。本校の自主性や主体性を育んでいく教育目標を理解し、温かく協力してくださる保護者の気持ちを、教師もきちんと汲んでいく必要がある。今後も家庭との連携を大切にして、保護者の意見に耳を傾けながら開かれた学校づくりを進めていきたい。

(7)後期（3学期）への重点項目の改善と追加項目

○重点項目の継続と改善

【①コンピュータや本から得た情報の活用能力】

コンピュータや本などから得た情報(知識)を、実際の生活のなかで活用することは、わたしたちがめざしている生活教育と切っても切れない深いつながりがあると考え。調べたことをもとに、自分で判断・決定していく力を身につけ、それを生かして問題を解決していく力を育ていく必要がある。子どもたちの生活全ての場面において、生活に生きてはたらく力を養うことが大切である。子どもたちにとって意味のある教育活動を展開していきたい。



① コンピュータや本から得た情報の活用能力	
目 標 値	設問 11 子どもは、人に聞いたり、コンピュータや本などを使って調べていた知識を、学習や普段の生活のなかに生かそうとしている。 H26 教師 D 43.5% H27 C 52.2% → A 80% 保護者 A 82.3% A 82.1% → A 90% 児童 A 85.0% A 80.7%
改 善 策	【改善策の修正】 ①情報の活用能力を育むため、パソコンだけでなく、本（図書）の活用も踏まえて授業の工夫を図る。教科書内容に応じて図書館の利用を意図的に組み、パソコンルームやタブレットパソコンを利用していくことと組み合わせ、基礎基本の定着を図るものと活用に重きを置くものを明確にして取り組んでいく。 ②2学期の個別懇談会時のチャレンジ学習の実施、3学期の学年別のパソコンルーム及びタブレットパソコンの利用などを実施し、学級や学年による取り組みを計画的に行う。 ③実践やふだんの授業のなかで、活用場面を問題解決学習で行ったり、実践に加えて明確な願いをもったくすのき学習を確実に行うなど、活用場面が繰り返されるよう授業改善を図る。

【⑫自校給食がもたらす影響(食育)】

栄養士は、栄養のバランスや歯の成長などはもちろん、地域食材を活用したメニューを取り入れるなど、子どもたちが口にする献立に意図をもって作っている。しかし、子どもたちの給食の様子をみると、簡単に給食を残したり、偏った栄養摂取をしている子どもがいる。

常に温かい給食を食べている子どもたちは、給食を作ってくれている人への感謝の気持ちは忘れてはいない。しかし、給食を通して自らの健康を考えたり、食材と地域とのつながりを考えたりする子どもの姿はあまりない。食育の生きた教材として自校給食の活用を検討していく必要がある。



② 自校給食による食育の充実

目標値	設問 12 附属小学校での自校給食のおかげで、食事を作ってくれる人への感謝の気持ちが育っている。
	H26 教師 D 34.8% H27 C 60.9% → A 80%
	保護者 A 83.6% A 86.0% → A 90%
	児童 A 93.4% A 94.8%
改善策	<p>【改善策の修正】</p> <p>①栄養士や調理員との双方向コミュニケーションを中心とした食育の授業を、担任や学年で立案し、実践する。そして、自分たちの食に対する意識や健康、栄養士や調理員とのかかわりといった視点で、委員会活動につなげていく。特に、残飯の量や食べ物の好き嫌いなど、子ども自身の給食に対する実態が意識できるような情報や教材で実践していくようにしたい。</p> <p>②先進的な取り組みの事例を職員に紹介するなど、食育を学ぶ機会を設定する。</p> <p>③家庭や父母教師会、大学教授を講師に招聘した授業など、家庭や大学との連携のあり方を、保健衛生指導部（教務主任）で探る。</p>

【⑬子どもの規範意識の向上】

規範意識は、「誰かが見ているから」「人に言われたから」という判断ではなく、自分の意思で正しいと思う判断をすることであり、教育目標の「生きる力の育成」につながるものである。この規範意識を高めていくことは、自由で自立した人格の育成と社会的責任の自覚を養う上でも、欠くことができない課題である。

公立小学校と比べて自由が認められている校風であるため、学校生活のなかで社会的ルールやマナーに対して意識が低いように感じる。みんなで生活しているという意識をもう少しもち、周りの人々の迷惑にならないように、みんなが安全に生活できるように社会的なルールやマナーに対して意識できるようにしていきたい。また、子どもの規範意識を高めるためには、学校教育だけでなく家庭の教育力を必要とする。学校と家庭が連携をとり、子どもたち一人一人が自由と責任のもとに自らの意思で正しい判断ができる力を育てていける取り組みを検討していく。



③ 子どもの規範意識の向上

目標値	設問17 学校と保護者が連携をして、社会のルールやマナーが身につくような指導ができている
	H26 教師 D 60.9% H27 C 60.9% → A 80%
	保護者 A 83.7% A 88.9% → A 90%
	児童 A 95.4% A 94.0%

改善策	<p>【改善策の修正】</p> <p>①児童会を中心とする委員会活動を通して、附属小のきまりを守る意識を高め、児童の自主的な活動のなかで規範意識が育めるようにする。学校生活のなかでも、図書館や職員室、玄関や廊下、トイレなど、みんなが共同で使う場所、たくさんの人々を通る場所などの公的空間や場所に対して、使い方やその場でのマナーについて学年に応じて気づかせたり、意識して行動できるようにする。</p> <p>②臨時通学班会の話題や登下校指導での子どもの様子などを、生徒指導主事が通学安全部と連携し、交通安全指導やマナーについて職員の共通理解を図るだけに終わらず、互いに頑張っている子どもの姿を認め合えるようにしたい。学級や学年集会、一斉下校の場でも、指導だけに終わらないようにする。</p> <p>③学年・学級通信で保護者へ伝え、共通理解のもとで指導を行うことができるようにする。学校のなかで見られたよい姿や頑張っている姿などを積極的に伝え、学校での様子が家庭でも話題になるようにする。</p>
-----	---

○重点項目の追加事項

【⑩英語活動の充実】

本年度はアメリカのバリス校より子どもが来校し、行事や授業を通して交流することができた。その時の子どもたちの様子を見てみると、自分から話しかける子どももたくさんおり、英語で話すことが好きな子どもは多い。しかし、すべての子どもがそのように積極的かという点、決してそうではない。

英語の教科化の動きのなかで、本校も教育課程上の英語教育の位置づけを見直し、本年度から英語タイムを設定して取り組んでいる。また、研究部とも連携して英語教育の推進を模作している。英語タイムやバリス校交流の行事、そして毎週の授業のあり方を、楽しくコミュニケーションを図ったり、英語に親しめる活動となるように具体的に検討していく必要がある。



④ 英語活動の充実																			
目標値	<p>設問10 子どもが英語に親しめるように、楽しく英語タイムや英語活動に参加できる工夫がされている。</p> <table style="margin-left: 40px;"> <tr> <td>教師</td> <td>C</td> <td>52.2%</td> <td>→</td> <td>A</td> <td>80%</td> </tr> <tr> <td>保護者</td> <td>A</td> <td>86.8%</td> <td>→</td> <td>A</td> <td>90%</td> </tr> <tr> <td>児童</td> <td>B</td> <td>78.4%</td> <td>→</td> <td>A</td> <td>80%</td> </tr> </table>	教師	C	52.2%	→	A	80%	保護者	A	86.8%	→	A	90%	児童	B	78.4%	→	A	80%
教師	C	52.2%	→	A	80%														
保護者	A	86.8%	→	A	90%														
児童	B	78.4%	→	A	80%														
改善策	<p>①英語タイムの活動計画を作成し、職員の共通理解を図って取り組んでいく。学年間や英語部で見合い、具体的でわかりやすい活動になるように検討していく。</p> <p>②英語部を中心にして、本校の英語教育推進の6年間の計画（バリス校交流を踏まえた行事や活動の整理）を作成する。英語の授業について、講師の先生との関係を踏まえ、担任として行うべきとことを明確にしていく。</p> <p>③小学校の英語教育の推進校や研究校を参観し、英語部で本校の英語教育のあり方を探る。</p>																		